

令和5年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

都道府県・
指定都市名

栃木県

学校名

益子町 益子小学校

人権課題

子供

対象学年・
取り扱った教科等小学5年生・
総合的な学習の時間

時数等

2時間

目標・人権教育のねらい

- ・茨城県ユニセフ協会による学習会に参加することで、ユニセフの活動や子供の人権についての理解を深める。
- ・「子どもの権利条約」に関するワークショップを体験し、世界で起きている様々な問題に気付く。
- ・話し合いを通して、問題解決に向けた手立てを考えるきっかけとする。

実施した内容

- ・「子どもの権利条約」の条文が書かれたカードを読む。
- ・カードを観点ごとに分類し、模造紙に貼り付ける。
- ・条文から世界にはどのような問題があるか考え、解決するための手立てについてグループに分かれて話し合い、結果を全体で共有する。
- ・ユニセフが行っている支援活動の様子を示した資料等についての説明を聞き、触ったり、実際に体験したりする。

工夫した点

- (指導上の工夫)
- ・ワークショップ型の活動とすることで、多様な意見が出し合えるようにした。
 - ・「子どもの権利条約」の条文を分類することで、人間らしく生活していくために大切なことは何か考えることができるようにした。
- (地域や関係機関との連携)
- ・昨年度に引き続き、茨城県ユニセフ協会のスタッフの方々に来校いただき、活動を実施した。出前授業の指導をお願いするとともに、ユニセフが支援活動で使用している道具や写真などの資料を持参していただき、説明していただいた。子供たちが自由に見たり触ったりしながら外国の様々な問題についても学ぶことができるようにした。
 - ・授業終了後、職員と保護者を対象にした学習会（講話）を実施し、保護者への啓発の場とした。

令和5年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

他教科との 関連

- ・ 道徳における命の大切さについて考える活動の中で、本活動を想起させることで、病気によって失われてしまう命について関連させながら考えることができた。

事業成果

いずれも5年生を対象としたアンケート結果から

- ・ 知識的側面：「子どもに関わる人権問題があることを知っている。」に対し「そう思う」と回答した児童の割合
事業開始時：58.3%⇒事業終了間際：79.4%
- ・ 価値・態度的側面：「自分が住んでいる地域や社会をよくするために、何をしたらよいか考えている。」に対し「そう思う」と回答した児童の割合
事業開始時：23.8%⇒事業終了間際：22.9%
【児童変容の分析】自分が住んでいる地域や社会をよくしたいと思っけていても、具体的に考えられていない児童が多いと考えられる。
- ・ 技能的側面：①「友達や家族の気持ちを考えて生活している。」に対し「そう思う」と回答した児童の割合
事業開始時：48.8%⇒事業終了間際：65.7%
②「困っている人がいたら、声をかけたり、解決するために行動したりしている。」に対し「そう思う」と回答した児童の割合
事業開始時：60.5%⇒事業終了間際：64.9%
【児童変容の分析】相手が嫌なことはしない、言わないなど、相手の気持ちを考えて生活する児童が増えた。また、困っている友達に声を掛け、助けようとする児童が増えてきた。

令和5年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

都道府県・
指定都市名

栃木県

学校名

益子町 益子小学校

人権課題

女性

対象学年・
取り扱った教科等小学6年生・
学級活動

時数等

1時間

目標・人権教育のねらい

- ・性別による役割分担の固定化を解消する意義について理解する。
- ・性差にこだわらず希望や目標をもって生きる態度を育てる。
- ・性別にこだわらない家族の在り方や、他の人の考え方などそれぞれの違いを認める。

実施した内容

- ・「男（女）のくせに～」 「男（女）らしく～」と言われた経験と、そのときの気持ちについて話し合う。
- ・家庭内の役割や職業で、男性や女性がするものだと見られているものはないか話し合う。
- ・男性向け・女性向けと言ったイメージが変化してきている役割や職業について話し合う。
- ・自分のこれからの生き方（役割や職業）に対して本時を振り返り、考える。

工夫した点

- (指導上の工夫)
- ・子どもたちの「男（女）のくせに～」 「男（女）らしく～」と言われた経験やその際の気持ちを想起させることで、性による役割や職業の固定化とその解消の必要性について、興味をもって考えられるようにした。
 - ・女性の大工や男性の看護師など、教師が実際に会ったことがある職業人の具体例を挙げ、本当に性別が職業選択に必要な要件であるのか考えさせるようにした。
 - ・活動を振り返り、自分が今からできることや、将来の職業選択について考えたことを書く活動を通して、性差にこだわることなく、自分らしさや自分がやりたいと思う気持ちを生かして役割を果たしたり、職業に付いたりすることの大切さに気付けるようにした。

令和5年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

他教科との 関連

- ・ 本時の学習を展開する上で、道徳で男女の信頼や友情について学習した経験を想起させ、互いの良さを認め合うことの大切さに気付けるようにした。

事業成果

いずれも6年生を対象としたアンケート結果から

- ・ 知識的側面：「女性に関わる人権問題があることを知っている。」に対し「そう思う」と回答した児童の割合
事業開始時：67.4%⇒事業終了間際：80.5%
【児童変容の分析】男だから、女だからといった従来の考え方にとらわれない様子が見られるようになってきた。
- ・ 価値・態度的側面：「クラスや学校をよくするために、何をしたらよいか考えている。」に対し「そう思う」と回答した児童の割合
事業開始時：31.1%⇒事業終了間際：41.3%
上記設問に対し「どちらかといえばそう思う」も含めた肯定的回答
事業開始時：60.0%⇒事業終了間際：78.3%
【児童変容の分析】学級や学校をより良くしていこうと考え、さらに具体的な手立てについても考えている児童が増えてきたと考えられる。
- ・ 技能的側面：「困っている人がいたら、声をかけたり、解決するために行動したりしている。」に対し「そう思う」と回答した児童の割合
事業開始時：42.2%⇒事業終了間際：67.4%

令和5年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

都道府県・
指定都市名

栃木県

学校名

益子町 益子小学校

人権課題

高齢者

対象学年・
取り扱った教科等小学4年生・
総合的な学習の時間

時数等

5時間

目標・人権教育のねらい

- ・高齢者に関する施設と交流したり、体験的な活動を行うことで、高齢者に対する理解を深める。
- ・高齢者が住み慣れた地域で生き生きと安心して生活していくために必要なことを考え、実践しようとする。

実施した内容

- ・体育館で車いす体験、体育館入り口付近のスロープでアイマスク・白杖体験を行う。
- ・聴覚や視覚に障害がある方を講師として、手話を体験したり、生活の中の様々な障害（バリア）についての話を聞いたりする。
- ・学校と高齢者の施設をオンラインで結び、施設の様子を見学したり、施設や利用者に関する話を聞いたりする。

工夫した点

- (指導上の工夫)
- ・体験的な活動を取り入れることで、高齢者や障害のある方々の気持ちに寄り添った共感的な理解ができるようにした。
 - ・キャリア教育とも関連させ、福祉の仕事に関する理解が深められるようにした。
- (地域や関係機関との連携)
- ・益子町社会福祉協議会の方に来校いただき、車いすやアイマスク、手話などの体験的な活動を指導していただいた。
 - ・移動時間や施設職員の負担軽減、感染症対策のためにオンラインで実施した。

令和5年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

他教科との 関連

- ・ 道徳で親切、思いやりについて学習した際、本学習と関連させ、高齢者の立場に立って考えることができるようにした。

事業成果

いずれも4年生を対象としたアンケート結果から

- ・ 知識的側面：「高齢者に関わる人権問題があることを知っている。」に対し「そう思う」と回答した児童の割合
事業開始時：25.0%⇒事業終了間際：81.3%
- ・ 価値・態度的側面：「自分が住んでいる地域や社会をよくするために、何をしたらよいか考えている。」に対し「そう思う」と回答した児童の割合
事業開始時：48.3%⇒事業終了間際：46.9%
上記設問に対し「どちらかといえばそう思う」も含めた肯定的回答
事業開始時：62.1%⇒事業終了間際：78.2%
【児童変容の分析】「そう思う」と強く思っている児童が減少したが、肯定的回答は増加した。活動を通して、地域社会のために何をしたらよいか考えようとする児童が増加したと考えられる。
- ・ 技能的側面：「困っている人がいたら、声をかけたり、解決するために行動したりしている。」に対し「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を合計した肯定的回答
事業開始時：93.8%⇒事業終了間際：100.0%

令和5年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

都道府県・
指定都市名

栃木県

学校名

益子町 益子小学校

人権課題

同和問題

対象学年・
取り扱った教科等小学6年生・
社会科

時数等

2時間

目標・人権教育のねらい

- ・江戸時代の身分制度や、差別を受けてきた身分について理解する。
- ・厳しい差別を受けた人々の思いや願いを考えることができる。
- ・差別に苦しみながらも、優れた技術で社会を支えてきた人々や、勇気をもって差別に立ち向かった人々がいたことを知り、彼らの思いや願い、生き方について考える。

実施した内容

- ・江戸時代の身分制度や、社会情勢について考える。
- ・「渋染一揆」についての資料を読み、財政に苦しむ岡山藩が人々に出した命令について考えるとともに、嘆願書を読んで、厳しく差別されてきた人々の思いや願いについて考える。
- ・渋染一揆のその後について知る。
- ・差別に苦しみながらも優れた技術で社会を支えてきた人々の思いや願いについて考える。

工夫した点

- (指導上の工夫)
- ・事前に斉藤隆介作「ベロ出しチョンマ」の読み聞かせの動画を視聴し、一揆を企てた者への処罰の厳しさを共感的に理解できるようにした。
 - ・不当な命令の取り下げを求めて、勇気をもって立ち上がった人々の思いや願いを考えることができるようにした。
 - ・身分制度において厳しく差別されてきた人々の功績について取り上げ、厳しい差別の中でも、優れた技術によって社会に貢献してきたことを理解できるようにし、明るい展望が感じられるようにした。

令和5年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

他教科との 関連

- ・ 道徳でいじめや人種差別等の問題について考える学習を行った際、本学習を振り返ることで、差別の不当性や被差別者の苦しみについて考えることができた。

事業成果

いずれも6年生を対象としたアンケート結果から

- ・ 知識的側面：「同和問題に関わる人権問題があることを知っている。」に対し「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と肯定的な回答をした児童の割合
事業開始時：51.2%⇒事業終了間際：85.8%
- ・ 価値・態度的側面：「自分が住んでいる地域や社会をよくするために、何をしたらよいか考えている。」に対し「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と肯定的な回答をした児童の割合
事業開始時：44.4%⇒事業終了間際：60.8%
【児童変容の分析】自由記述では様々な人たちと関わり合うことや人権問題について知り、行動していくことの重要性についての記述が見られた。
- ・ 技能的側面：「困っている人がいたら、声をかけたり、解決するために行動したりしている。」に対し「そう思う」と回答した児童の割合
事業開始時：42.2%⇒事業終了間際：67.4%

令和5年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

都道府県・ 指定都市名	栃木県		学校名	益子町 益子小学校	
人権課題	アイヌの人々	対象学年・ 取り扱った教科等	小学6年生・ 社会科	時数等	1時間
目標・人権教育のねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・アイヌ民族の歴史や、差別について知る。 ・アイヌの文化に触れ、身近に感じるとともに、私たちの文化とアイヌの文化両方を大切にしていこうとする態度を育てる。 				
実施した内容	<ul style="list-style-type: none"> ・アイヌ語による挨拶を聞き、アイヌ民族についての説明を聞く。 ・アイヌの文化（言葉・衣服・道具・風習など）について知る。 ・シャクシャインの戦いや明治政府の政策など、アイヌの歴史や差別について知る。 ・私たちとアイヌの人たちの違いや共通点を受け入れて生きることの大切さを確認する。 ・アイヌの道具や服を触ったり、実際に着てみたりする体験を行う。 				
工夫した点	<p>(指導上の工夫)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教科書では短い文章で触れられているだけなので、実際に多くの資料や実際の道具などを用意していただき、実感を伴った理解が図れるようにした。 ・講師のアイヌ語によるあいさつを聞き、興味をもてるようにした。 ・アイヌの衣装を身に付けたり、道具に触れたりできる体験的な活動を取り入れた。 <p>(地域や関係機関との連携)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・宇都宮大学地域デザイン科学部、若園雄志郎准教授に来校いただき、出前授業として指導していただいた。アシスタントとしてボランティアの学生も来校し、体験時の補助として活動していただいた。 ・アイヌ文化財団による児童生徒向け副教材「アイヌ民族：歴史と現在～未来を共に生きるために～」を活用して学習を行った。 				

令和5年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

他教科との 関連

- ・ 道徳で国際理解や国際親善について考える活動を行った際に、日本とアイヌとの歴史を振り返り、想起させることで、互いの文化を受け入れ、尊重しあうことの大切さについて実感することができた。

事業成果

いずれも6年生を対象としたアンケート結果から

- ・ 知識的側面：「アイヌの人々に関わる人権問題があることを知っている。」に対し「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と肯定的な回答をした児童の割合
事業開始時：50.0%⇒事業終了間際：85.8%
【児童変容の分析】 アイヌについて初めて知ったという児童も多く、アイヌの文化も日本の文化も大切にしていきたいという感想が見られた。
- ・ 価値・態度的側面：「自分が住んでいる地域や社会をよくするために、何をしたらよいか考えている。」に対し「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と肯定的な回答をした児童の割合
事業開始時：44.4%⇒事業終了間際：60.8%
- ・ 技能的側面：「自分とはちがう考えをもった人とも話したり、なかよくすごしたりしている。」に対し「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と肯定的な回答をした児童の割合
事業開始時：93.3%⇒事業終了間際：91.3%
【児童変容の分析】 元々高い水準であったためか、数値的には減少する結果となった。一連の学習を通して、自分をより深く見つめ直すなどしながら、新たな課題に気付いた結果かも知れない。

令和5年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

都道府県・ 指定都市名	栃木県		学校名	益子町 益子小学校	
人権課題	外国人	対象学年・ 取り扱った教科等	小学校3年生・ 道徳	時数等	1時間
目標・人権教育のねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・外国と日本の小学校の違いとつながりについて考えることを通して、外国と日本の学校の違いやつながりに気づき、外国に親しみを感じ、もっと知りたいという実践意欲を高める。 ・他の国には日本と違う生活や文化があることを知り、それらの意味を理解し、他の国の伝統や文化に関心を持って親しもうとする態度を育てる。 				
実施した内容	<ul style="list-style-type: none"> ・外国の小学校はどんなところか想像する。 ・外国と日本の小学校の違いを捉え、日本の小学校で学ぶ外国人児童の気持ちを考える。 ・外国と日本の小学校の違いに気付いた主人公の気持ちを考える。 ・外国との違いやつながりで、すごいな、おもしろいなと思ったことを思い出し、発表する。 ・外国人や、外国での生活経験のある方が異文化との関わりの中で感じた良さや生活していく上で困ったことなどについて語る動画を視聴する。 				
工夫した点	<p>(指導上の工夫)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・これまでに学習した同じ価値項目の教材を示して想起させることで、振り返り、学びを生かした学習活動が展開できるようにした。 ・登場人物の立場に立つことで、自分事として課題を捉え、思考を深めることができた。 <p>(地域や関係機関との連携)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本で生活している外国の方や、外国で生活した経験のある方に日本文化と自国の文化の違いによる戸惑いやそれぞれの良さなどについて話していただき、動画で撮影したものを授業で活用した。 				

令和5年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

他教科との
関連

- ・国語で外国の家について学習する際、本時の学習を想起させることでよりそれぞれの文化を大切にしていこうとする心情を育てる一助とした。

事業成果

いずれも3年生を対象としたアンケート結果から

- ・知識的側面：「外国の人が、言葉や習慣の違いや不当な扱いにより、普段の生活で困っていることを知っている。」に対し「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と肯定的な答をした児童の割合

事業開始時：78.0%⇒事業終了間際：88.4%

【児童変容の分析】道徳の授業ではハワイの小学校を例に、主に文化のつながりや違いについて考えたが、動画を視聴することで異文化交流についてよさと戸惑いの両面から捉えることができた。

- ・価値・態度的側面：「自分とは違う考えをもった人とも、考えや気持ちを伝え合うことは大切だ。」に対し「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と肯定的な回答をした児童の割合

事業開始時：98.0%⇒事業終了間際：100.0%

- ・技能的側面：「困っている人がいたら、声をかけたり、解決するために行動したりしている。」に対し「そう思う」と回答した児童の割合

事業開始時：57.1%⇒事業終了間際：75.0%

令和5年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

都道府県・ 指定都市名	栃木県		学校名	益子町 益子小学校	
人権課題	ハンセン病患者等	対象学年・ 取り扱った教科等	小学校全学年・ 特別活動	時数等	1時間
目標・人権教育のねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・人権週間に合わせて集会（ミニ・フィルムフォーラム）を行うことで、豊かな人間性や自尊感情を育成するとともに、人権の大切さに気付き、差別のないよりよい人間関係を醸成することに努める態度を育てる。 ・ハンセン病患者・元患者への差別について知り、様々な病気にかかった人たちへの接し方について考える。 				
実施した内容	<ul style="list-style-type: none"> ・動画「差別を生まないために」を視聴する。 ・ハンセン病についての動画を見て、気付いたことや初めて知ったことなど、感想を話し合う。 ・ハンセン病に限らず、新型コロナウイルス感染症やインフルエンザなどにかかった人に対し、どのように接したらよいか考える。 ・活動を振り返る。 				
工夫した点	<p>（指導上の工夫）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・フィルムフォーラムとすることで、新型コロナウイルス感染症やインフルエンザが流行している時期でも大人数が集まることなく、学級ごとに行えるようにした。 ・児童の実態や発達の段階に合わせた動画を自作し、活用した。 ・動画の導入部分で映画「もののけ姫」に登場するハンセン病患者について問いかけ、子どもたちが興味を感じられるようにした。 				

令和5年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

他教科との 関連

- ・ 体育（保健領域）で感染症について学習した際や、総合的な学習の時間で福祉をテーマに活動した際などに関連させて指導した。

事業成果

知識的側面は3～6年生を対象にしたアンケート結果から。価値・態度的側面と技能的側面は全学年児童を対象にしたアンケート結果から

- ・ 知識的側面：「ハンセン病患者等に関わる人権問題があることを知っている。」に対し、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と肯定的な回答をした児童の割合

事業開始時：31.8%⇒事業終了間際：78.6%

【児童変容の分析】ハンセン病について全く知らなかった児童が多く、実践によってハンセン病やその患者等への差別について初めて知った児童が多かった。「病気の人に優しくしたい」などの感想が上がった。

- ・ 価値・態度的側面：「クラスや学校をよくするために、何をしたらよいか考えている。」に対し、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と肯定的な回答をした児童の割合

事業開始時：71.3%⇒事業終了間際：84.0%

- ・ 技能的側面：「困っている人がいたら、声をかけたり、解決するために行動したりしている。」低学年は「こまっているひとがいたら、こえをかけたり、せんせいにしらせたりする。」に対し、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と肯定的な回答をした児童の割合

事業開始時：92.3%⇒事業終了間際：96.3%

令和5年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

都道府県・ 指定都市名	栃木県		学校名	益子町 益子小学校	
人権課題	インターネットに よる人権侵害	対象学年・ 取り扱った教科等	小学校6年生・ 学級活動	時数等	1時間
目標・人権教育のねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・日々の生活やSNS上での、よりよいコミュニケーションの方法について理解する。 ・日々の生活やSNS上でよりよい関係を築くことについて考え、自分の課題に合った具体的な目標を決める。 				
実施した内容	<ul style="list-style-type: none"> ・アンケートの結果や資料を見て問題意識をもつ。 ・SNS上でのやり取りの様子を見て、何が問題なのか考え、話し合う。 ・問題についての解決方法を考え、話し合う。 ・自分がSNSを使う際に、大切にしたいことを考え、個人目標を決める。 				
工夫した点	<p>(指導上の工夫)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・事前の児童アンケートの調査結果を児童に示し、SNSに対して利便性だけでなく不安を感じている児童もいることを伝えるとともに、警察庁の資料を提示することで、全国的にもSNS上のトラブルで困っている児童が多くいることに気付くようにし、問題を自分事として捉えられるようにした。 ・トラブルになり得るSNS上でのやり取りの様子を例示し、問題点や解決方法について考えた。受け手の心情を共感的に受け止め、ペアやグループで話し合いながら考えられるようにした。 ・全体で考えを共有する時間を取り、様々な視点から問題点や解決方法について考えられるようにした。 ・話し合い活動をもとに児童自身が実践可能な取組を決め、各自が意識して生活し、互いに励まし合いながら実践できるようにした。 				

令和5年度 人権教育研究推進事業 <人権教育研究指定校事業>

他教科との
関連

- ・社会科の情報に関する学習および国語の説明的文章教材の学習で、本学習での学びを想起させ、適切なインターネットの使用について考えた。

事業成果

いずれも6年生を対象としたアンケート結果から

- ・知識的側面：「インターネットによる人権問題があることを知っている。」に対し「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と肯定的な回答をした児童の割合
事業開始時：84.7%⇒事業終了間際：95.1%
【児童変容の分析】インターネットによる人権問題についてはこれまでも継続して指導してきたので、他の人権問題と比較して知識の水準は高かった。自分事として捉えることができたようだった。
- ・価値・態度的側面：「友達や家族の気持ちを考えて生活している。」に対し「そう思う」と回答した児童の割合
事業開始時：46.7%⇒事業終了間際：58.7%
【児童変容の分析】相手の気持ちを考えて言葉を掛けたり、行動したりすることの大切さに気付き、行動しようとする児童が増加した。
- ・技能的側面：「自分とはちがう考えをもった人とも話したり、なかよくすごしたりしている。」に対し「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と肯定的な回答をした児童の割合
事業開始時：93.3%⇒事業終了間際：91.3%
【児童変容の分析】元々高い水準であったためか、数値的には減少する結果となった。一連の学習を通して、自分をより深く見つめ直すなどしながら、新たな課題に気付いた結果かも知れない。